Steinbeck 研究

森　　政　　勝

(5) ***In Dubious Battle***, 1936

人気を神経質にきらつていた Steinbeck がこの作を印刷しようと思つたのは，この作で人気を落とし，真に自分を知つてくれる友人たちの気持にこたえ，自分がいわゆるユーモア作家であるという評判をくつがえそうとしたためであつたと言われる。

この作は California の Torgas County における季節移住労働者であるりんご採取者の中途半端なストライキを取扱つた小説で，今日でもなおれつきとした存在価値をもつているが，フランスの現代批評家 C. E. Magny はあえてこれを *Iliad* であると称している。in dubious というのは，他にも解釈はあるであろうが，R. W. Horton と H. W. Edwards はオルグのやり方が in doubt であると解している。[55] Steinbeck の言う左翼的メロドラマであるこの労働小説は彼の短篇 *The Vigilante* や *The Raid* などと並んで *The Grapes of Wrath* の序幕をなすものである。1930年代には十余篇のいわゆるストライキ小説が出版されたが，この作は次のような点でそのような小説とは異つている。その一つは，この作ではストライキをやる人が理想化されたプロレタリアトであるということ。その二つは，共産主義者のオルグの用いる手段と，ストライキ誘発のねらい。その三つは，ストライキの指導者である医師の Doc Burton を客観的な解説者としている点などである。New York のある左翼のインテリがこの作を評して「イディオロギー的には不十分」であると言い orthodox party principle とは一致しない点を責めているが，「共産主義組織は共産主義者の数ほどもあるものだ」[56] と言つて，この評言の愚かしさを指摘したのは P. Lisca であるが，Steinbeck 自身の共産主義イディオロギーについての My information for this book came mostly from Irish and Italian Communists whose training was in the field, not in the drawing-room. They don't believe in ideologies and ideal tactics. They do what they can under the circumstances.[57] という言葉を見てもこの評言の見当外れであることがわかるであろう。労働者の実体がどれほど鮮明に描かれていても，この作はもちろん革命の宣伝書ではない。社会転覆の唱道者が一顧だに与えなかつたことは不思議ではない。

California Commonwealth Club の金メダルを再度授けられた Steinbeck は，共産主義者もまたその反対側の者もこの作を憎むであろう……これは政治的な，あるいは，経済的な偏見という視野の狭い眼鏡をかけて書いたものではない，とも言い，共産主義者ないしは資本家としての作中人物には関心がなく，どこまでも subject to the weakness of humans and to the greatness of humans[58] な人間に関心を持つていたのである。しかもこのような人間を「善」といい「悪」という目隠しをつけた狭い視界からは決してながめようとはしなかつたのである。これは I don't want to put on the blinders of 'good' and 'bad', and limit my vision. という Doc Burton の言葉によつても明らかである。作者はこのような観点から人間描写をしているが，作中人物はその役割の許す限りにおいて「作中人物」であることに関係なく生きているのであり，筋や環境には全く無関係な存在性を持つている。

この作は多くの批評家によつて誤つた評価をされた。というのは，この作が余りにも差し迫つた政治的経済的な問題を含んでいたため，小説としてよりはむしろ過激な論文として広く読まれたからである。この作が小説であることを知つた評論家はわずかに二人だけであつて，その一人は Burton Rascoe (*John Steinbeck* の著者) であつたと言われるほど文学的価値を疑問視されたが，Steinbeck 自身はこれを a novel and not a tract と言つている。この作を小説として分析する場合には，Steinbeck のいう cold で conscientious な観察が human な要素をうまく審美的に融合させているか，という問題と，この観察と人間的要素の融合がうまくなされる手法は何であるか，という問題がある。客観的解説者として配されている Doc Burton は cold で conscientious な観察をやる余りにも哲学者であり余りにも社会学者であるが，彼こそ作者その人であると考えられる。彼は自分とその共産主義者の友人たちを全歴史を通じて働くもろもろの力の生産物であるとし，また暴徒的気質をもつた生き者であるとして冷然と考え，この闘争は終りなき戦いにおける，あるいは力の永遠の平衡における一つの属性であると見る。共産主義者たちは敵になぐられたり殺されたりするかも知れないのに，また，彼らが組織化しようとする人々からは裏切られたり憎まれたりするのに，それでも大胆に行動しなければならない理由は何であろうか？ この作を流れているものは，実に，共産主義者をそういう気持にさせる問題なのである。このような気持は *The Raid* や *The Grapes of Wrath* の Casy にもうかがわれる。このような気持にさせるものは，やらなければならないからやる，とにかくやれるだけはやる，という一つの信念であるが，しかし敵側が自分たちよりは一歩前進していることを認めているところに懐疑がある。Doc Burton はストライキをやる人々に出来るだけの援助はするが共産主義そのものを信じているのではない。これはすなわち Steinbeck の内心の闘争の一方の立場を説明するものである。彼はマルクス流な分析とその妥当性を問題にしているのではなく，階級戦と不可避的な革命は将来行われる可能性があることを容認している。しかし別の立場から生ずる懐疑は次第に深まつてゆくのである。これは階級やイディオロギーを離れて，人類そのものの性質についての懐疑にまで進展する。Steinbeck は資本家の搾取をはつきり憎みブルジョア的美徳を攻撃するが，別に正統的な左派の人ではない。読者の同情は明らかにストライキをやつている人に向けられるが，勇敢で新しい型の自然人 Doc Burton (*Of Mice and Men* に出てくるラ(騾)馬追いの Slim と兄弟分) は共産主義のオルグの機械化された非人間性の恐るべきことを読者に思い起こさせる。たとえば共産主義者の愛他的人道主義と称されるものや，共産党が悲惨を冷血的に利用したり権勢獲得の目的のためにはもつとも卑劣な方法を冷然と用いたりすることを暴露しながら，彼は共産主義的精神とその手段の間違つた特色を批判しており，共産主義は人間生活を窒息させるものであるとして受け入れてはいない。

ストライキというテーマの主要な展開は Doc Burton, Joy, Jim (指導者の一人) の間の数回の討論中に見出だされる。この三人は知的見地に立つてこのストライキを種々な視角からながめているが，彼らの知性と意欲の均整のとれた対立の中に，このテーマの文学的表現としてのこの小説の価値がある。この作が発表される前十年位の間は，ストライキの結果生み出される事実に対する批評家の見解は単一なものであつたが，この作中に見られるイディオロギーの抑制と平衡にはびつくりさせられたようである。言うならば，この作に見られる ideological death という現代的テーマ——これは André Malraux の *Man's Fate* や Randall Jarrell の詩にもある——は F. J. Hoffman の賞賛するところとなつた。この作はストライキ

という観察可能な人生の姿の忠実な記録ではあるが，多くの行動は結局 Steinbeck のおなじみのテーマ——実在物としての集団というテーマ——を中心として進展するのである。集団的人間（group-man——これは Steinbeck にとつては God ででもあつたのであろうか？）は単独で行動する人間とは異つた態度を持つものであるということと，集団的人間はそれ自身別個の動物であるということとは非常に違つたものではないように見えるが，前者は観察しうる事実をあらわし，後者は直感的な結論である。Steinbeck の立場はこの後者であつて，そのためにこの作には非現実的要素がその中心に取入れられている。この要素がなければこの作は固苦しい記録的な物語の域を出なかつたであろう。個人的意志とその時々の出来事を超越する大きな力の中にこのストライキを入れて考える集団的人間説を奉ずるのが Doc Burton すなわち作者その人なのである。

この作の大胆で簡潔な輪郭のうちに，作者は不況時代の社会的不正の演劇的知的な可能性を実験的哲学的に十分利用できた。作者の社会観についての見解の表明はこの作と *The Grapes of Wrath* だけである。ロマンチックなほがらかさのあつた彼の前作の Rousseau 的楽園は，抑制された写実主義の始めて見られるこの作では Marx のユートピアとなり，聖なる人食いは献身的な同志となつている。前作には人を当惑させるような奇妙な外見があつたが，この作では simplification が霊感の根源であり assurance が作業の方針となつている。なるほどこの作の realism は未熟であり不安さえ伴つているが，乱暴で粗大なところがありながら力のこもつたこの散文体の客観性は，素材の劇的表出によつて補強され，かくて幻想の大家も幻滅の傑作ともいうべきものを作り出したわけである。この作には Steinbeck の見解に影響を与えたと見られる二つのものが発見される。その一つは California の谷間という土地そのものであり，その二つは Ricketts の生物学研究所である。土地というものはその土地を熱愛する人をテストし，かつ分類するものである。このような分類はアメリカ小説にはよく見うけられるが，Steinbeck の場合には，それが彼の oversimplification を導き出している。Ricketts の研究所に対する彼のしろうとしての関心がなかつたらこの分類は彼をして Whitman-Sandburg という文学的伝統をくむ小説家にさせていたであろう。[59]

(6) ***Of Mice and Men*, 1937**

この作は季節労働者である二人の男，すなわち，非常な力もちで頭のからつぽな Lennie と，小柄で聡明な George との土にまみれた友情についての悲劇的な物語で，一種の folk tragedy である。作中人物には重要性がないからこの物語は悲劇的ではないという人もいるが，これは人物の悲劇ではないとしても観念の悲劇であることは認めなくてはならない。しかし It is difficult to strike the note of tragedy if the persons of the drama〔= *Of Mice and Men*〕have no more dignity than chipmunks.[60] と言つて暗々裏にこの作の悲劇調のないことを非難しているのは A. H. Quinn である。さてこの作のテーマについての注釈として Steinbeck は Ben Abramson にあてた手紙で…it's a study of the dreams and pleasures of everyone in the world[61] と述べている。作中人物は粗朴な形でアメリカの夢を表現していると考えられるが，しかも彼らは自らの夢を否定しているのである。

C. E. Jones が1940年10月～11月の *Sewanee Review* に発表した *Proletarian Writing and John Steinbeck* によればこの作は to almost everyone else…simply a swift moving tale of psychopathic phenomena…, of horror and sudden deaths, of man's love for man ということになり， the disciplines of time and place（事件はすべて薄暗い木曜日から薄暗い

日曜日までの間に起こる）であるという出版者の自賛的予告のついたこの作も V. F. Calverton によれば pot-boiler, a side-show trick, a clever stunt[62] ということになる。ともあれ，流線形の小品でそのまま脚本に変えられるこの小説で Steinbeck は全国的な脚光を浴び，この作はベストセラーになつた。

これは短い playlike novel であるが *The Moon Is Down* とは異り，最初は小説の形で書かれ，やがて脚本化されたものである。この作について Steinbeck は「読みうる脚本，ないしは演じうる小説を作ろうとする一つの実験である……脚本と小説双方の，ある手法を用いる新しい形式を発見するためである[63]……」と言つているが，最初は上演を目的とした三幕の脚本にするつもりであつたともらしている。戯曲としての *Of Mice and Men* は非常な賢明さをもつて工夫された，まとまりのある可憐なもので，非政治的見地から人間性を批判し平和と安らぎを求める純粋な人間的あこがれがいかに価値のあるものであるかを示している。B. Rascoe はこの作の成功を論じ，manner と stature では Sophocles の悲劇にも比較しうる，と大変なほめようである。

Steinbeck はあることを意識しながら創作のペンをとるのが普通である。この作品についての Antonia Seixas の考察を要約してみよう。この作には作者が意識して書いた三つの面がある。第一は，物語を書くという面。第二は，social protest の面。第三は，象徴的な面。第一は悲劇的で多くの読者には説明のつかない終局を伴つている。第二は読者には明瞭で，浮浪性をおびた頼りのない人々の悲劇が非常な簡潔さと同情とをもつて書かれている。第三は考え深い人や想像力の強い人や芸術作品の中に自らの幻を読み取ろうとする人々にはよくわかる[64]，というのである。象徴的解釈は各人の自由であつて，動物と人間を愛情の果てに絞め殺し semi-sadism を実行する低能の巨漢 Lennie を動物ないしは暴力（これは作者の愛するものであるが彼の暴力は田園的牧歌的なフン(雰)囲気で包まれているのが常である）と見たり，あるいは，盲目的な集団的人間と見，George を機敏で油断のならない賢明な指導者と見るのも一つの解釈であろう。また「Lennie の弱々しい心は商業主義的社会における人間の頼りなさを象徴しており，更に言えば，精神を持たない宇宙における人間の困惑を象徴している[65]」とも考えられる。

この作では写実的ないしは比ユ(喩)的という二つの面に立つて，陳腐なもの，機械的なものにならないように物語を進めて行く様式が重要な意義を持つのであろうが，実はそこに含まれている意味が読者を惑わす最大なものとなつているのである。それは，この二つの面が言い換えれば，現実的な立場と象徴的な立場であり，この両方の立場がひどく異つた方向をとり異つた意味を持つていて，読者にはその区別がつきかねるからである。現実的な立場から見ると，この作は，やがて来たるべき時期――その折には社会性というものが次第に稀薄になり社会変革の必要も次第に減少している――に期待をかけるという前向きのものであり，象徴的な立場では，社会的公式などというものを廃棄する（これは Steinbeck の先入観である）という後向きのものである。かくてこの本の二つの意味は相反する方向をとる。この相反は作中人物の一人がいつも You can't get yourself little farm. と言えば，他の一人はいつも I can too. と答える対話でも明らかである。

この作は *Tortilla Flat* と *In Dubious Battle* の中間的な在り方である。というのは，この作には *Tortilla Flat* に見られる極端な緊張もなく，また歴然たる緩和もなく，*In Dubious Battle* の特徴である高度な集団的緊張もないからである。この作はそれより以前

のすべての作の要素を組合わせており，非常に特異な作である。言い換えれば Steinbeck の過去がこの作でその極限に達しており，同時にこれが新しい出発点であることは多くの批評家の認めるところである。この作に奇妙な別個の物語のあることを指摘しこの出発点は十字路である，とする見方もあるが，これは Steinbeck の小説の複雑性を現わすにふさわしい一つの見方である。この十字路説は，この作を境として別の新しい傾向が生れることを予言している。この傾向はこの作の発表一年前ごろから動いていたと思われる。この事実は彼の第二期（*Sea of Cortez* を含む）と称されるものの始まることを指している。この期の重点は活発な運動による社会変化から，科学と教育による改革へと移る。それは結局科学を遊離させる（*Sea of Cortez*）ところまで移るのである。過去から現実へ，自然から社会へ，個人主義的ロマン主義から社会的写実主義へと進化して行く Steinbeck は，この作で現実，社会社会的写実主義へと到達したのである。*Tortilla Flat* は互に同じ境遇にいる者の喜びにだけ共鳴しているが，この作が更にそういう者の社会的必要物にも共鳴しているのはその証拠である。*In Dubious Battle* や *The Grapes of Wrath* には皮相な急進主義は見られるが，実際には *Of Mice and Men* が Steinbeck の著作中最も社会的である，[66] となす S. E. Hyman の説は以上の事実を裏書きするものである。

このグウ(寓)話的な作は一見したところでは，彼の小説家としての方向の変化はほとんど示してはおらず，それどころか初期の作に見られるフン(雰)囲気に逆戻りしているように思われる。たとえば Steinbeck が崇物狂的な態度をもつて土地を愛している点，その土地所有の願望にとりつかれた Lennie と George を主人公にしている点，natural なものはすべて善であるという非合理的な直感をあらわしている点など。しかしこのフン(雰)囲気は粗悪化し商業化しがさつなものになつている。すなわち，アメリカの幼稚な過去に迎合しているように思われる。しかし詳しく観察すればこの作には，彼の物語能力，機械的文学形式を用いながらそれを一般に妥当なものに盛り上げている手腕の輝き，かかしのようなみすぼらしい人たちに生命の息を吹きこみその自由意志と環境のバランスをして読者に畏怖と同情の奇妙な気持を起こさせる熱烈さ，換言すれば創作的情熱の常識支配などが見られるのである。

Maupassant の小説にあるような用語の直接性と，短篇小説や脚本などで用いられる用語の節約をもつて語られているこの物語の中の中心的人物に対する Steinbeck の態度に Frank Norris の影響を見出しているのは E. Wilson であつて Lennie が George にうさぎ飼育場の話をせがむくだりは，Norris の *McTeague* の中で塩漬け牛肉販売人が黄金の食器の話をひとりの少女にせがむくだりから暗示されたものであるに相違ないとしているが，これは興味深い発見であると言わねばならない。

以上 *Of Mice and Men* についての好意的な評価を述べて来たが，最後に W. O. Ross によつて紹介されている James Farrell の remark を記したい。それによれば all the mannerism and none of the substance of genuine realistic writing[67] というのである。これは1932年以後の作品について共通して言えることである。ただし *To a God Unknown* と *Tortilla Flat* は全然 realistic ではないので除外しなくてはならない。この所見はやや言い過ぎであるとして見のがし得られようが，Steinbeck は巧みな娯楽物を書く半ばいかれた作家であるという Farrell の軽ベツ(蔑)の言葉はそのままには受け取れない。

(7) ***The Long Valley***, 1938

12篇からなる短篇集 *The Long Valley* は初めは *The Red Pony* と呼ばれていた。この

作はSalinasの谷間を舞台として夢のように泰平な生活をオウ(謳)歌する人々の姿をChekhovを思わせるような筆致，直感，観念の集中をもつて描いている。しかしこの物語のテーマは人間を動物と同一視し強者が弱者を食い，あるいは，それを殺して楽しむというようなことであるように思われる。

この作で Steinbeck はついに完全な写実主義を達成し，文学的思想に理論的な結論を与えている。詩的象徴は現実的な背景の中で巧みに現わされており，その詳細は具体的に示されている。この短篇集中の勝れた作では，その基礎となる象徴がある程度抑制されており，その抑制は強調されたテーマと結び付いて， Farrell や Dreiser の粗雑に組立てられた歴史物よりは非常に満足のできるものとなつている。Steinbeck の作品には現実の要求が非常に広く現われ，人間が指示する観念の方向がはつきりしている場合が多いので，この点で Farrell などより多く読まれるのではないかと思う。

The Chrysanthumums

これはこの集中最も美しい物語で中年の牧場経営者の妻の非常に微妙な性格研究である。この作の物語の仕方の美しさは，作者が言葉を浪費して説明で読者の気持を損ずるようなことをしない点にある。つまり言葉を趣のあるように節約して効果を出し読者の想像にゆだねる余裕を残していることである。この作には感動の要素はあるがそれはこの作の全体的な構想と，物語が明らかにする事実の特殊な性質とによつて抑制されている。この物語の基礎となつているのは，植物の豊ジョウ(饒)な発育と人間の肉体的な暴力や性欲との想像的関係である。この作には珍しく Steinbeck の欠点であるといわれる felicity が見られず人間描写も十分に卓越している。André Gide はこの作が remarkable for its adroitness[68]であり Chekhov の最上の短篇小説と似ていると賞賛している。

The Red Pony

この中篇小説は1937年には物語として小版の形で出され，1938年には中篇小説として *The Long Valley* の中に収められ，1945年には改訂版として別冊となつたものである。Steinbeck はこれを書こうとした時「わたしは子供の世界を再創造しようと思う。その世界というのは妖精や巨人の世界ではなく，おとなたちには感じられないような強烈な色彩をもち，はつきりした味わいがあり，一瞬のうちに子供たちを圧倒してしまうようなおかしな傷心的感情のある世界である（例えば *The Great Mountains* の終りに出てくる Jody の感情など)。わたしは午後の感じ方——夕暮時木立の中で歌う小鳥の気持を書きたいと思う」[69]と述べている。この有名な *The Red Pony* は可愛がつている動物への少年の熱情を取扱つたもので Mrs. Rawling の *Yearling* と全く同種のものである。この作は *Yearling* より一層多くの特権を与えられた人間水準と，自然の一層やさしくも愛らしい姿を示している。この作には特有な素晴らしさと哀感がある。J. W. Beach は次のような賞賛の言葉をその著 *John Steinbeck : Journeyman Artist* の中で述べている。I mention it here as another case of human types and relationships as fine and subtle as any in Chekhov.[70]

The Red Pony は実際的には存在するが，Steinbeck はこの作中にも，生活に対する旧来のアメリカ的理想を，すなわち過去の genteel tradition を暗示することを忘れてはいない。この作中の少年は自然界に存在する冷酷な残忍さを発見するが，それに対する作者の取扱い方には読者の心を強く打つものがある。この少年は Mark Twain の Tom Sawyer 以上に少年というものの真髄を完全に具体化している。この作のテーマは生命の尊重ということであ

ろう。芸術的に見ればこれは Steinbeck の成功作の一つで，その文体は全巻を通じて欠点もなく，そのムードは感傷性を伴わずに保たれており，その主題は単純に，かつ控え目に展開している。

Flight

これは優秀作の一つでその firm な散文体には Hemingway の影響が立証される。

The Snake

動物の言葉を用いての人間生活表出といつた象徴作。

The Leader of the People

この作中に出てくる開拓者は西方への移民を語るが，作中の言葉には Steinbeck の思想を解くのに重要なかぎとなるものがある。たとえばこの開拓者はかつて a whole bunch of people made into one big crawling beast[71] を指導してきたのであつた，とか Every man wanted something for himself, but the big beast that was all of them wanted only westering.[72] とかである。

The Vigilante

この作の価値は，暴徒の精神の洞察にある。物語としてはほとんど取柄はない。

(8) ***The Grapes of Wrath***, 1939

あらすじ——土地を収用されて黄塵地帯 (Dust Bowl) から出てきた Oklahoma の百姓 Joad 一家は一台のぼろ自動車に乗つて California に出かける。彼らは California が豊かな国であることを信じている。この一家は，頑丈な老人で決して「家の中に住むように訓練された」(house broke) ことのない祖父，狂信的に宗教的で疲労のはなはだしい祖母，孤独なおじさんの John，家族の支配を黙々として妻に任せている父，家族のために夢想したり計画を立てたりする勇敢で強く忍耐力のある母，頭の悪い Noah，格闘して人をあやめたかどで刑務所にいたがその刑期を終えて出てきた Tom，Tom の物静かな力を賞賛する気取屋の Al，身体の弱い夫への愛情におぼれている Rose of Sharon，身ごもつている Connie，子供の Ruthie と Winfield。このぼろ自動車には，以前説教者であつたことのあるいなか社会主義者の Casy がいる。この苦しい旅の間に祖父と祖母は死に，Noah は脱走するがそれでも Joad 一家は旅を続けてゆく。California では彼らは郡の治安官や労働契約者たちによつて迫害され，Casy は投獄され Connie は逃走する。餓死に悩まされた彼らは官営のキャンプでしばらく時を過ごすが，ブラックリストにのつている果樹園でくだものを採取するためにいやいやながらそこを去る。Tom は Casy に会う。Casy は労働争議者を指導する。Casy は自警団員に攻撃されて死ぬが今度は Tom がその殺人者を殺してしまう。Joad 一家は逃げ出し，Tom をかくまいながら綿摘み仕事をやる。疲れはて恐怖におののく母はついに Tom をそこから送り出す。Tom はオルグとして Casy の仕事を継続しようともくろむ。暴風雨のさなかに Rose of Sharon は死児を生む。仕事のないまま Joad 一家は餓死に直面する。[73]

The Grapes of Wrath が1939年の春出版されると世間は騒然となつた。政治的な根拠から，あるいは，好色文学[74]であるという理由から，東は New York 州の Buffalo から西は California に至るまで，この本は各所で焼かれ禁じられ借りられこつそり持ちこまれ，ラジオの全国放送で討議され，Spellman 大司教の行つた公然の非難が Hearst 系の新聞にのつた。M. S. Shockley がその評論 *The Reception of 'The Grapes of Wrath' in Oklahoma* で述べるところによると，Wetbrook Pegler はこの本の下劣な言葉について論じ，Raymond Clapper

はこの本をある経済界の人々に推賞し，F. J. Taylor はその内容が事実でないことを *Forum*[75] で論じ，*Collier's*[76] の論説はこれが共産主義の宣伝であると非難し，California の Associated Farmers of Kern County はこれが obscene sensationalism で propaganda in its vilest form であるとして公然非難し，Kansas 市の教育委員会はこの本を図書館から締め出し，東セントルイスの図書館会議はこれを追放し三冊を焼却した，とある。また Ardmore の教区牧師 W. Lee はこれを heaven-shaming and Christ-insulting book であるとした。I haven't read a word of it, but I know it's all a dirty lie.[77] と言いながら，この作が下劣でけがらわしい本であり，局外者が Oklahoma 州を嘘言で汚そうとする悪意ある試みであると見るのが大多数の態度であつたのであつて，この作を経済的社会的人間的な諸問題の正直で同情的な表現，しかも芸術的にも勝れた表現であると見る人は最初のうちは少数であつた。この作の持つ力と文体の美を欽定聖書にたとえた Wewoka の牧師もいたのではあるが。こんな事情にもかかわらずこの本は広く国の内外で読まれその売行きは *Gone With the Wind* に次ぐといわれる。*Uncle Tom's Cabin* 以後いかなるアメリカの小説もこの作の持つ多くの面におけるほど直接的な反動を起こしたものはないのであつて，一種の国民的な審美的熱狂をまき起こしたのである。つまり純文学が闘争の中心になつたのである。この作はデンマーク，オランダ，フランス，ノールウェイ，ポルトガル，スペイン，ポーランド，ロシアの各国語に翻訳された。1940年 Steinbeck はこの作で Pulitzer Prize を得 National Institute of Arts and Letters の一員に択ばれた。grapes は plenty の意であり，*The Grapes of Wrath* は *Revelation*, *Deuteronomy*, *Jeremiah* などを参考にして書かれたもので主の栄光を暗示している。このような聖書への言及はこの作中の人物 Jim Casy にも見られる。この頭文字は Jesus Christ と同じて Jim Casy は Jesus Christ の簡素で直接的な写しである。納屋の中で弱り果てた一老人に自分の乳房をふくませる Rose of Sharon（最後の章）はキリスト復活の姿を象徴しているが，これは新教徒によつては聖餐式で，またカトリック教徒によつてはミサで祝福されるものである。キリスト復活の姿はキリスト教の伝説や文学においては珍しくない。たとえば Eliot の multifoliate rose の象徴の中にも発見される。Rose of Sharon の中では生も死も同一物であり，この女を通じて生が死に打ちかつのである。この作の前後に出された作品において Steinbeck は象徴主義と比ユ(喩)談とを用いているが，その中で彼の考えているのはキリスト教的，ないしは新キリスト教的観念の広範な領域である。総体的に見れば彼の物語の文脈はキリスト教的象徴主義であるということができよう。この作の最終節はこの作全体の指導的テーマと考えられるものを象徴している。そのテーマとは，生命本能の一つの型，すなわち Joad 一家によつて代表される普通の人間の生命への固執の一つの型である。一方 Oklahoma の農園の工業化によつて西方へ追いやられる季節移住労働者の苦境は，約束された土地（天国）への人間の永久的探索の一つの象徴である。

この作は非個人性への進展を更に一歩進めており，作中人物には hero とか likeable character というものは特に存在せず，*In Dubious Battle* 中の Mac や Jim のような指導者もいない。これは筋を押し進める力，事件の発展とその必然性，盛り上がる憐れみとおののき，衝突，暴力などという要素が取入れられた悲劇であり，各人物は非常に良心的な演技を示す勝れた性格俳優に似ている。したがつてこの作中の「人物は，われわれが自ら持ち，また友人たちが持つていると感ずるような意味での魂とか精神的な個性を持つているとは思われない」[78]。なおこの人物は総じて Chekhov の作中人物とは対照的である。次にこの人物を社会性

の面からながめてみよう。この作はすべての社会問題が個々の場面と人物の中にはなはだしく効果的に劇化されており，各人物は流浪と極貧にもかかわらず特定階級の人として行動する——これは Steinbeck の作に独自なものである——が，いずれも社会を固めるための接合剤ともいうべきものを身内に持つており，社会統合がこの作の偉大さとなるのである。作者はこれを十分に意識しながら驚くほど巧みにそれを表現している。社会性を持ちながらも邪悪に直面すれば臨機に反応する彼らの愚行も，永遠に人間的な愚行の一断片に過ぎないのである。土地を奪われ土地所有の願望を不断にいだき，窮状にあえぎながら不平の鬼となつている Joad 一家も実は有りふれたアメリカの一家族に過ぎないが，本質的には象徴的なあやつり人形であり，当時の絶望感以上のあるものを例証している。Ma Joad の中にだけは信ずべき人間を見るがその他はそれぞれ特殊な性質をもつたカイライ（傀儡）でしかない。[79] と A. H. Quinn は言う。なるほどこの母こそ一家の中心人物であつて，アメリカ母性の指導者でもあり，またその魂でもあり，その家庭は台所にあるがその精神は天国にある。しかしその他の人物も決してカイライ（傀儡）ではない。このことは more important is Steinbeck's creation of Jim Casy, "the preacher", to interpret and to embody the philosophy of the novel[80] という F. I. Carpenter の言葉を読んでもうなずける。また前述のように Jim Casy の頭文字は Jesus Christ の頭文字であるとするキリスト教的象徴をあえて作者がやつている点を考えてみてもそう言わざるを得ない。このような Casy の中にわれわれは素朴な人間の信仰を認めるのである。Casy のような人間は他の者から傷付けられることはあつても永久に押しつぶされることは断じてないであろう。「罪なんてものはないし美徳なんてものもない。人が使う材料があるだけだ。それもみんな同一物の一部分だ。人が使う物のうち，あるものは美しくあるものは美しくない。人はただそれだけのことが言えるだけだ」[81] という Casy は Steinbeck の中期の創造物ではあるが，Casy の中には *Cup of Gold* の Merlin の悲劇的予言，*In Dubious Battle* の中の自己犠牲，*To a God Unknown* の中の土地への神秘性などが慎重に表現されている。Casy の発展は Tom（これは作者自身であると称される）の場合と同様，変化して行く社会状態（これがこの作の一つのテーマであろう）を象徴している。これは personified group に過ぎない Joad 一家の進展と似ている。

思想的な面から見ると，この作はアメリカ思想の三つの偉大な skeins をひとまとめにして明確なものにしている。その一つは Emerson の oversoul によつて代表されるもの，すなわち庶民信頼および新教徒的自タイ（恃）（神秘的超絶主義），その二つは Whitman の万人愛の宗教とその集団デモクラシー。このような神秘的詩的観念に，その三つとして，William James や John Dewey の実用主義的現実的哲学およびその哲学の効果的行動に対する強調を新しい方法で結合発展させている。この新しい方法とは，新教を奉ずる個人を社会的集団のメンバーに変形させること（I を we に変えること）であり，あるいは，受動的個人を能動的関係者に変形すること（観念論者を実用主義者に変えること）である。第一の方法は Whitman の詩的思想，言うならば Sandburg の *The People, Yes* の哲学，すなわち庶民の永続と庶民の究極的勝利への詩人の神秘的信念を継承しており，第二の方法は James や Dewey の哲学を受け継ぐものである。かくてこの作は otherworldly and passive ではなく earthly and active な一種の新しいキリスト教を発展させているのであつて，仏教的フロイド的マルクス的のいずれでもない。そこに重要な意義がある。しかしなんと言つても，この作の基本的観念はアメリカ的超絶主義の観念である。すなわち Maybe all men got one big

soul ever'body's a part of.[82] ということである。この観念からすれば，個人は他のすべての人々と共にわかち持つている本能を信頼するようになる。この自己信頼は Emerson のやつたように単に個人的自由を求めるのではない。それはむしろ Whitman がやつたように社会的自由とか集団的デモクラシーを探し求めるであろう。このデモクラシーがお上品な禁忌を放棄したり，道徳律の伝統的観念を修正したとしてもそれは当然のことである。ともあれこの作者は自分の理想を実現するために仕事をするであろう。自身を越えたところにある目標に向つて仕事の目的をはつきりさせるであろう。さて前記のような古い哲学や思想もこの作の中では生長して新しいものになり新しい有機的な統一体になつているのである。このようなものは人物や行動の中に具体化されているので，もはや観念というよりは事実のように思われる。古い観念が想像を通じて新しい具体的形体をとつている（アメリカ哲学は Casy に，その行動化は Joad 一家に）ところに *The Grapes of Wrath* の永続的価値と偉大さがあるのである。

The Scarlet Letter は罪を象徴し *Moby Dick* は悪のたとえ話，*Huckleberry Finn* は文明に対する natural individual の反抗を示し，*Babbitt* は社会の狭い習俗を公然と非難した。*The Grapes of Wrath* はこのようなものを越えて，生活の積極的な哲学を説き，行動が人間生活の絶体的な本質であり，失敗や必要が怒りを生み出せば再建がそれに続くとし，観念を恐れる盲目的保守主義をよくないときめつけている。この作はしばしば不況時代の *Uncle Tom's Cabin* であると称されるが，この両作はいずれも，言わばその時代に対する緊急明白な小論文であつた。*The Grapes of Wrath* は社会的不正義を突く小論文でもあつたのであるが，それを小説化された宣伝とだけ考えた人々からは烈しい抗議や弁護を受けた。しかし後には a culminating expression of the spiritual and material forces that had discovered and settled a continent[83] として残されたのである。機械的な暴力や憎悪なしにその時代の危機の苦しみを戯曲化したものとしては最初の小説であつた。

新しい集団に加わることによつて，個人は自身より偉大なものになりうるという観念はアメリカ的なもので Whitman から出ており，Marx から出てくるロシア的なものではない。もつとも三位一体説を信奉する Anglo-Saxon にとつては随分罰あたりと考えられるような要素を含んではいるが。集団的人間説を説く Steinbeck は，この季節労働者移動の叙事詩的事件に Joad 一家と共に関係している人間集団というものの一つの意識を読者に与えようとしたのであり，また，集団的な人間とか国民には新しいいくつかの型が織りなされているものであることを自ら知ろうとしているようである。この作の悲劇は家族の分散にある。しかしこの小説の新しい道徳は，すべての愛情は家族の愛情に取つて代りうるということである。Casy は他の人々のために死に，Tom もまた人々のために死のうとし，Rose of Sharon も象徴的には母性愛をすべての人々への愛情に変形する。この作では民主々義とか en masse という語が始めて現実的に用いられている。「これはわたしがこれまで手がけたもののうちで最も困難な仕事である」[84]と自ら称している Steinbeck は，そもそもこの作で何を攻撃しようとしていたのであろうか？ それはアメリカの社会であつたであろうか？ プロレタリア小説は本来は the life of the working classes あるいは any social or industrial problem[85] を労働者の見地から取扱うものであると信じていた彼の手になつたこの作が，1940年ごろでは彼の信念の最も勝れた例であると言われる（J. W. Beach）ことを考えてみれば，攻撃の対象物がアメリカの社会でなかつたことは明らかであろう。この作では土地の不在所有権とい

う悪以外には悪に対するこれといつた批判は見出せない。そうだとすれば攻撃の対象は人間であつたであろうか？　自分自身を「当然あるべきものとか，ありうるものとか，あるかも知れないものではなく，むしろ実際にあるもの」[86]に関係させようとする "is"-thinking を重視する彼には，人を憎むことも攻撃することも出来ない。人間は自分の所有物に対する心配から，自分より不仕合わせな者に対しては残忍な行為をなすものであるのに，彼のペンの跡は心暖まる人間関係を展開させているのである。

The Grapes of Wrath が非常な sensation を巻き起こしたことはすでに述べたが，そもそもあのような人気は何故であつたろうか？　まず考えられるのは，この作が時宜を得たものであつたばかりではなく，話題的興味があつたということであり，次には季節移住農民の生活状態を改善しようとする一般の関心が広まつていた時に丁度この作が出たということである。これが論文であるかないかはしばしば論争されたし，宣伝文書であるかないかという性格もやかましく論じられたが，かりに改革論文としてみても Okies（アメリカ中部の移住農民）やArkies（アーカンサス出身の放浪農民）の生活状態に実際的に有益な効果をあげたことが人気に投ずる一つの要因であつたであろう。このような農民の苦境が Steinbeck にこの作を書かせる激情と怒りを起こさせたのであつた。彼の憤激は非常なものであつたようで，彼の目には Joad 一家の人と，高価な自動車に乗つて国道66号線上で季節移住民を旋風のように追い越して行く人だけしか映らなかつたらしい。不況時代の他の小説からは，アメリカ人は怒りの目的のない狂気じみた衝撃だけしか得られなかつたのに，この作はある計画と抑制のある意識とをアメリカに与えたのであつた。この作には輝くばかりの筆勢があり，忘れがたい叙述，動く力の挿話，社会的不正の力強い説明などがあるが，よく見ると，この作の印象は作家の怒りの念ではなく，効果の考案者としての聡明さである。作品の魅力が人気を博す大きな要因であることは言うまでもないが，この作が時好に投じたのは別にその急進主義にあつたわけではなく，P. Rahv の言うように Perhaps in its vivid recreation of a "slice of life"[87] にあるのであろう。また依然として読者の絶えないのはごく平明な事実によるのであつて，H. Straumann によれば Joad 一家の「集団意識という価値，極貧者の団結（助けの手を差しのべてくれるのは貧乏人だけであると考える）という価値，表現もできないような悲惨な困窮に直面した時に率先して事に当る個人という価値」[88]などであろう。

この作には *The Pastures of Heaven* の持つような芸術性はなく，*In Dubious Battle* の持つような写実性もない。作中人物とテーマは前作からの借用が多く，若かつたころの彼の興味とむらきは矢張り反映している。彼は初期の作品ではいろいろ苦心したが，この作では自らの魅力と演出法と見解の単純化とを見事に示してそれを偉大な小説にした。このような *The Grapes of Wrath* の散文体に影響を与えたものとしては，聖書，Dos Passos の Newsreel，ないしは Camera Eye の手法，民間の慣用語法，Whitman, Hemingwey, Sandburg の *The People, Yes*，映画の台本である Pare Lorentz の記録映画 *The Plow That Broke the Plains* や *The River*，また同じ作者のラジオドラマ *Ecce Homo* などが考えられる。Steinbeck はこのように Hollywood の感傷的な象徴主義からも学んだことは確実である。そのため，この作があだかも映画撮影所で書かれたように手軽にスクリーンに映し出されるということになつたし，本としてもフイルムとしてもほとんど同様に効果をおさめたように見える。この物語は確かに偉大で包括的で広範囲にわたる内容をもつている。彼はこの小説が二つの独立的な部分にわかれないように骨を折つた。前後参照，相互に織りなす象徴，戯曲化

および合唱曲風な効果などがその手法であり，この手法はパノラマ式な部分を舞台的なものに向くようにと計画している。しかし実際はこれが逆になつていることがわかる。彼は二種類の人物の双方のがわに立つことによつて単一の印象を与えようと工夫している。細部はともあれ，大体この作の手法は伝統的なものであると言える。というのは，小説の大詰は，代表的集団の人々の物語の中で演劇化さるべきものである，というのが小説の伝統的手法であるからである。この小説はやや冗長ではあるが，その計画は F. J. Hoffman でなくても，三つの方法に帰されることがわかるであろう。その一つは写実的方法であつて，個々の場面の描写は効果的である。その二つは象徴的方法であるが，第一のものほど成功はしていない。「この作の象徴は当惑的に，かつ始末に困るほど露出過剰である」[89]。たとえば *In Dubious Battle* の性と土地に関する神秘主義の不器用な復活と見られる Rose of Sharon の場合など。その三つはもつとも不十分な哲学的方法で what are perhaps some of the most wretched violations of aesthetic taste observable in modern American fiction[90] を含んでいる。Hoffman はこの作を Sandburg の耳ざわりな *The People, Yes* の小説版であると決めつけている。この作は，Steinbeck の反省よりもむしろ熱狂的で突飛な言辞に依存すると言われるが，その文体や修辞や知的内容からすれば，この小説は最悪の状態にある彼の文学作品であり，また最も混乱した状態にある彼の頭脳が見られる，と断じている批評家（Hoffman）のあることも知つておく必要はあろう。Dos Passos の *42nd Parallel* や *The Big Money*, E. Caldwell の *Some American People* や *You Have Seen Their Faces* などには，fiction によつて抽象的考察を混じえた報告をやるという傾向があるが，Steinbeck のこの小説にもそれが見られる。つまり作品が次第に筋と結び付かなくなり，ついには小説としての興味がなくなる危険な傾向がある。彼が異常な力をもつた宣伝家であることをこの作が示したとしても，それは，純粋な想像的作品に必要とされる文学的手腕が欠けているからではない。また，創作芸術は本来は倫理の問題である，と考えなかつたからでもない。社会的テーマを直接取扱つたこの作で，はたして彼が芸術を忘れてしまつたかどうかが大事な問題として残るのである。

ある観点からすれば，この小説は Steinbeck の最も自然主義的な小説で，その文体は客観的でひどく明細である。Dreiser 風な自然主義と異るのは，基礎的な象徴の流れがあるということである。こういう点では Norris や London と似ている。Woolf の *To the Lighthouse* の中の挿話の観念をアメリカの言葉で語り変えている部分もあるが，人間に対する Steinbeck の正しい理解力，対話の淡白さと力強さ，各地の事情に精通していたことなどは独特無類のものである。この小説の最も本質的な要素と思われる筋と人物を最少限にしながら，他人の手にかかつたら感傷的な宣伝に終るような材料を使つて，立派に，しかも情緒的には人を感動させずにはおかない小説を作つたことは偉業とも言える。彼は「人々が話すのを聞き，人々が行動するのを見，小宇宙の投影が大宇宙の輪郭をはつきりさせることを願つた」[91]という。この作が偉大であるのはまさにこの小宇宙と大宇宙との，換言すれば，具体的なものと一般的なものとの結合に外ならない。Steinbeck の芸術的修業はこの作で終り，彼の realism はこれを頂点として退潮の一途をたどることになる。

ハドルフ EPNETH

注

55 Rod W. Horton and Herbert W. Edwards: *Backgrounds of American Literary Thought*, p. 243

56 Peter Lisca: *The Wide World of John Steinbeck*, p. 114

57 Lewis Gannett: *John Steinbeck's Way of Writing* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 30)

58 Peter Lisca: *John Steinbeck: A Literary Biography* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 10)

59 Donald Heiney: *Recent American Literature*, p. 232

60 Arthur Hobson Quinn: *The Literature of the American People*, p. 959

61 56と ibid., p. 134

62 E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. xxiv

63 57と ibid., p. 30

64 Antonia Seixas: *John Steinbeck and the Non-teleological Bus* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 276)

65 Charles Child Walcutt: *American Literary Naturalism*, p. 262

66 Stanley Edgar Hyman: *Some Note on John Steinbeck* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 159)

67 Woodburn O. Ross: *John Steinbeck: Earth and Stars* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 178)

68 56と ibid., p. 95

69 58と ibid., p. 4

70 58と ibid., p. 83

71 Edmund Wilson: *Classics and Commercials*, p. 41

72 ibid., p. 41

73 James D. Hart: *The Oxford Companion to American Literature, 3rd Edition*, p. 287

74 性的乱交について，Casy は There ain't no sin and there ain't no virtue……と言つているがこれは作者自身の言葉であろう。

75 時局問題を論ずるアメリカの月刊雑誌（1886——1950）

76 アメリカの週刊誌で1918年以降は一般向きの小説や論文をのせていた（1888——1957）

77 Martin Staples Shockley: *The Reception of 'The Grapes of Wrath' in Oklahoma*, p. 239

78 Joseph Warren Beach: *John Steinbeck: Journeyman Artist* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 81)

79 60と ibid., p. 960

80 Frederic I. Carpenter: *Philosophical Joads* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 241——242)

81 Blake Nevius: *Steinbeck: One Aspect* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p. 202)

82 60と ibid., p. 248

83 Robert E. Spiller: *The Cycle of American Literature*, p. 219

84 57と ibid., p. 35

85 62と ibid., p. xxxiv

86 Frederick Bracher: *Steinbeck and the Biological View of Man* (E. W. Tedlock and C.V. Wicker: *Steinbeck and His Critics*, p.187)

87 Morton Dauwen Zabel: *Literary Opinion in America*, p.556

88 Heinrich Straumann: *American Literature in the Twentieth Century* (斉藤数衛訳) p.138

89 Frederick J. Hoffman: *The Modern Novel in America, 1900——1950*, p.152

90 ibid., p.152

91 58と ibid., p.13